

富士癒しの森研究所第4期教育研究計画 (2011(平成23)年度～2020(平成32)年度)

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林富士癒しの森研究所

The 4th Education and Research Plan of Forest Therapy Research Institute,
The University of Tokyo Forests (2011-2020)

Forest Therapy Research Institute, The University of Tokyo Forests,
Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

－目次－

第1章 基本理念	399
第1節 富士癒しの森研究所の特徴	399
第2節 第3期試験研究計画における教育と研究の総括	401
(1) 第3期試験研究計画における教育と研究の総括	401
(2) 教育の成果	403
(3) 研究の成果	403
第3節 富士癒しの森研究所の担うべき役割	405
第2章 計画	405
第1節 研究計画	406
(1) 【機能】癒しの森林空間の分析と創造	407
(2) 【技術】地域に適合した木材利用システムの構築	409
(3) 【社会】「癒しの森」づくりの地域社会への普及	409
(4) 試験林等の継承と再編成	410
第2節 教育計画	411
(1) 大学の実習/演習の支援	411
(2) 地域循環型「癒しの森」プロジェクトに連動した幅広い教育活動	412
第3節 施業計画	412
第4節 広報活動	415
(1) ガイド、公開講座等のイベント活動	415

(2) 掲示・看板等の整備	415
(3) ウェブサイト等の利用	416
第5節 山中寮内藤セミナーハウスおよび東京大学運動会との連携.....	416
(1) 山中寮内藤セミナーハウス	416
(2) 東京大学運動会との連携	417
第6節 管理計画.....	418
(1) 土地管理	418
(2) 施設等の管理と整備	418
(3) 教職員組織	419
(4) 安全衛生	420
附表.....	420
沿革年表.....	420
参考文献.....	421
文献.....	421

第1章 基本理念

第1節 富士癒しの森研究所の特徴

富士癒しの森研究所は、東京大学富士演習林として山中湖村民の所有地約12haの寄附を受け、1925（大正14）年に設立された。本研究所は、山梨県南都留郡山中湖村山中および平野（東経138°52′，北緯35°24′）に所在し、全体としてL字型の一団地を形成している。全林を3林班に区分し、大学有地の部分をI林班（10小班），借入県有地部分をII，III林班（各14小班）としている（図2-6-1）。現在の面積は、大学有地7.51ha，借入県有地33.54ha，総面積41.05haである（表2-6-1）。

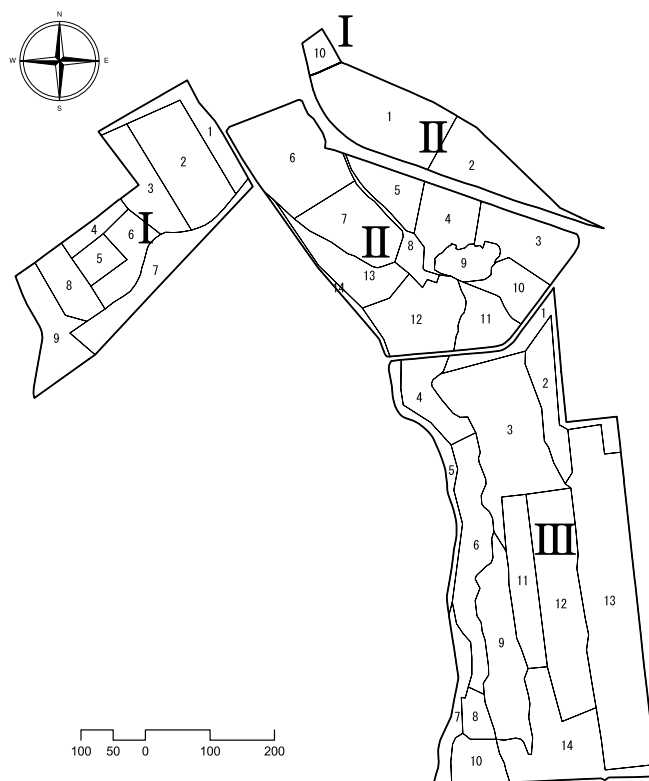


図2-6-1. 林小班図

表2-6-1. 地区別面積及び蓄積（参考）

林班	行政区画	地別	面積(ha)	蓄積(m ³)	備考
I	山中湖村	林地	7.11	3,221	カラマツ, アカマツ
	山中	除地	0.40	—	管理棟, 苗畑, 馬場
II	山中湖村	林地	11.26	5,068	カラマツ, モミ
	平野	除地	2.39	—	セミナーハウス, 山中寮, グラウンド
III	山中湖村	林地	19.61	5,478	カラマツ, 寒地性樹種
	平野	除地	0.28	—	—
計			41.05	13,767	

亜高山帯の冷涼な気候にあり、創演当初より高山植物の育成や寒地性樹種の生育実験など自然環境を活かした試験研究が行われてきた。また、富士山麓、山中湖畔に面する観光地、避暑地として多くの人びとを集める地理的条件を生かして、1970年代より、森林の保健休養機能に関する研究が開始された。以後、この分野の研究により力点を置くようになり、これまで風致およびレクリエーション、環境教育の場として空間に配慮した施業を行ってきた。

森林の保健休養機能を研究する上での、本研究所の立地特性をまとめると、以下ようになる。

- ①富士山と山中湖を有する豊かな自然資源：山中湖村は富士山と山中湖に代表される自然資源に恵まれ、特に富士山は国際的な誘致力を持つ観光資源であり、富士箱根伊豆国立公園富士団地として良質な自然体験を提供することが期待されている。
- ②日本有数のリゾート地：山中湖村は避暑地として大正期より各界の指導者より注目され、多くの別荘地が整備され、当地の環境を高く価値する人々が住民として多く定着している。
- ③都心から2時間というアクセスの良さ：昭和40年代以降、東京近郊の日帰り圏にある観光地として急速に発展し、毎年多くの観光客が訪れる。また、村民の多くが観光関連産業に携わっている。
- ④誰でも気軽に散策できる平地林：富士癒しの森研究所および周辺の山林は、極めて地形が緩やかで、森林体験に乏しい人、体力に自信のない人にとっても、容易に散策しうる環境となっている。また、本研究所周辺の森林は戦後に植栽したカラマツやアカマツの針葉樹人工林が上層を占めており、たとえばスギやヒノキの針葉樹人工林、シイ・カシ林などのうっそうと茂った常緑樹広葉樹林に比べると、林内が非常に明るく開放性が高い印象が強い。

このように、本研究所は森林の保健休養機能を発揮するための好条件がそろっており、かつ、そのための研究教育活動による成果は周辺地域の期待に合致するものである。すなわち、森林の保健休養機能に焦点を当てた本研究所としての研究教育活動の遂行は即、地域貢献につながりうる。

ここで、本研究所周辺地域の森林について現況を見ておく。山中湖村の森林は戦後に植林されたカラマツやヒノキ、アカマツなどの針葉樹人工林が主体であるが、林業の採算悪化などの理由により、森林整備は全体的に遅れている。その結果として、過密で見通しの悪い林分が多く、枯損木なども散見される。個人別荘などでの薪ストーブ普及により必ずしも良質でない木材や枯損木などの利用可能性が見出される機運が高まっている。しかし、需要者と森林所有者とのつながりが希薄であるために、村内におよそ484,000m³（針葉樹357,000m³、広葉樹127,000m³）と十分な森林蓄積があるにもかかわらず、個人別荘や地域住民の間では慢性的な燃材不足に陥っている。

木材が利用されることにより森林整備が推進されるようになれば、地域全体として森林の保健休養機能を高度に実現できる可能性が見込まれる。本研究所の前身の富士演習林は、およそ30年

にわたって森林の保健休養機能に関する研究・施業に取り組み、多くの知見と施業実績を蓄積してきた。今や、これまでの実績を礎とし、上に述べたような地域の課題克服に資する教育研究活動を展開する段階に至っている。

こうした背景のもと、第4期の本教育研究計画である2011(平成23)年度から、名称を「富士演習林」から「富士癒しの森研究所」に改め、地域社会への応用を念頭に置いた森林の保健休養、癒し効果の実現に関する教育研究に特化した研究所として歩むこととなった。

本研究所の名称中にある「癒しの森」とは、第一義的には森林の持つ保健休養機能のうち、特に人の身体や心の不健康な状態をやわらげる癒しの機能について注目し、その機能を高度に発揮することのできる森林のことを指すが、癒しの機能を良好に発揮し続けるための施業および周辺の社会との関係も含めた管理のありよう、さらには実際に人々に対して癒しの効果を発揮し社会に貢献することのできる利活用のありようなど、人間と森林との関係そのものが、人間(社会)への癒しとなることを目指す、そのような森林のことを象徴的に言い表す言葉として「癒しの森」を今後使っていくこととする。

第2節 第3期試験研究計画における教育と研究の総括

(1) 第3期試験研究計画の基本方針および総括

富士演習林の第3期試験研究計画では、第1期と第2期の試験研究計画で実施された寒地性樹種の生育実験など自然条件を生かした試験に一定の成果が出たため、保健休養機能、森林のレクリエーション機能、環境教育に重点を置いた研究教育が行われた。第3期の基本方針は以下の通りである。

- (a) 富士演習林の主要な研究として環境教育研究を位置付け、教育学分野および環境学分野との協働による環境教育研究を推進する。特に研究を推進する為の基盤となる、ふれあい体験の施設およびベンチ、休憩施設、林道、標識等の研究環境の整備を図る。
- (b) 富士演習林の地域貢献並びに地域住民の研究貢献の機会として講習会、公開セミナーを開催し、学校教育利用を促進する。また、環境教育研究の成果を還元する場として、ホームページをウェブ上における環境教育サイト、森林教育サイトとして活用する。
- (c) 環境教育の実践に資する為の自然環境データベースの充実を図り、それを利用者および見学者に伝える技術についても蓄積する。
- (d) 半世紀以上に渡る風致施業と風致計画学分野の研究の蓄積により成立した歴史的森林景観を保全し、従来の風致計画手法の継承と新しい森林景観の創造を図る。
- (e) 試験地の見直しを行い、試験見本林として再整備し、樹木解説板や標識等の整備を図る。

第3期試験研究計画の実行に際しては、2004（平成16）年に富士演習林のマスタープランとアクションプランが設定され、それらに基づいた実行がなされた。その結果として以下のような成果が得られた。

- ①環境教育研究を推進する基盤として、携帯端末から情報を得ることのできるQRコード付き看板の設置が行われた。また、湖畔広場では、体育チームや運動会の学生の協力を得て、老朽化した東屋の改築が行われた。しかし、予算や労力の関係から、林内に設置されたベンチや看板等は更新が十分に行われているとはいえず、更なる充実を図る必要がある。
- ②実験研究計画に従って、地域住民や別荘居住者に対する公開講座等が開催され、地域住民との交流、啓蒙活動が盛んに行われた。具体的に親子森林教室、落ち葉たき体験、ベレット・薪利用で創る癒しの森と題した地域住民向けの森林利用に関する公開講座等が開催された。また、2008（平成20）年度からは、東京大学の教職員に対して本研究所ならびに演習林の活動を広く認知してもらうとともに、演習林の利活用を推進することを目的として東京大学教職員を対象とした特別講座を開催し、学内に対するアピールが行われた。特に、秋に開催されたキノコに親しむイベントでは40名を超える参加があり、人気の講座となっている。

また、Webサイトについては、公式ブログを立ち上げ、本研究所内のイベントや動植物などを随時紹介することにより閲覧回数が多くなっている。しかし、現在のスタッフでできることには限界があり、環境教育サイト、森林教育サイトとして十分に活用されているというところまではいたっていない。

- ③自然環境データベースについて、気象データの蓄積が順調に行われた。しかし、人員不足などの問題から、植物季節に関するデータ整備は進まず、2010（平成22）年に主要植物の開花フェノロジー調査を行ったのに留まった。一方、生物基盤データの整備が全演的に進められ、秩父演習林や研究部スタッフの協力のもとに、植物部門、鳥類部門、昆虫部門などのデータや標本の整備、リスト化が進んだ。また、長期生態系プロット（LTER）の調査、次期試験研究計画策定のための森林現況調査が行われ、より精度の高い森林状況、動態を把握する基礎データが得られた。3回目のLTER調査では、従来のLTERプロットに隣接し新たなLTERプロットが追加設定された。
- ④景観に配慮した施業（以下、風致施業）の結果として、現在の快適な富士癒しの森研究所が現存していることは特筆すべきことであり、今後も森林景観の取り扱いに十分に留意して管理を行っていく必要がある。第3期では、森林空間において森林利用者の景観評価実験を行い、人が森林を見る際の心理的な評価構造が明らかにされた。また、見学路にも施業地と非施業地を比較できる場所が設定され、見ることで理解する環境教育の素材として活用された。また、風致施業が下層植生に及ぼす効果を検証するために、施業地と非施業地における下層植生を調査

した結果、風致施業が行われることによって、下層植生の最大高が30cm以下に抑えられること、30cm以上の木本種が消失するという知見が得られた。ただし、風致施業が人々の心や体に及ぼす効果については十分に検証されたとは言い難く、今後の重要な課題として残されている。

- ⑤富士演習林に設定されていた多数の試験地について現地検討を行い、既に試験地の機能を果たさなくなっているものについては試験地から外し、一般人工林（あるいは天然生林）として取り扱うこととした。これによって、30ヶ所存在していた試験地は13ヶ所に集約され、再整備が行われることとなった。樹木解説板や標識等の整備については、予定はしていたものの、予算的な裏付けができずに改訂までには至らなかった。掲示板については2010（平成22）年度に購入することができたため、早い段階で内容を充実させて、教育効果を高める必要がある。

（２）教育の成果

第3期試験研究期間中（2002（平成14）～2010（平成22）年度）において、東京大学農学部および大学院農学生命科学研究科の実習利用はのべ448人・日で、4つの実験／実習科目の利用があった。これら以外でも東京大学の理学部、工学部および他大学からの利用を多く受け入れており、期間中の学生実習は合計で62回、利用者数では、のべ3,831人・日であった。特に第3期から東京大学教養学部の講義の利用が活発に行われ、利用件数の増加に貢献している（表2-6-2）。研究調査、合宿、研修などの利用を含めると、大学および大学院の利用者は10,087人・日に達する。

期間中の全ての利用者数はのべ201,067人・日であった。特に湖畔広場を中心として、初等教育機関による遊びやレクリエーション目的の利用が多いのが本研究所の特徴といえる。その他、山中寮の隣にある星美ホームの宿泊客の利用が定期的に見られるほか、山中湖村の主催する市民マラソン、祭りなどの目的で演習林の一部を提供する形で地域貢献が行われている（表2-6-3）。

山中湖周辺には、市民が散策できるような公園が少ないため、本研究所内の湖畔広場は地域住民、観光客、幼稚園児等の憩いの場となっている。湖畔広場については、現在、事前に事務所に利用申込書を申請し、許可を得てから利用する決まりとなっているが、現実には無許可で散策等に利用されているのが実態である。したがって、利用に関する内規を整備し、実態に合わせた利用がスムーズかつ安全に行われるような仕組みを今後整備する必要がある。

（３）研究の成果

本研究所関連の研究成果は末尾の文献に一括掲載した。第3期試験研究計画期間中は、森林風致に関わる分野をはじめとして植物生態学（森林植物学）分野、造林学分野などにおける研究の進展が見られた。森林風致に関わる研究としては、保養地としての山中湖村および富士五湖地域の展開と課題に関する研究（末尾文献番号70, 78, 85, 97, 106）、景観に配慮した森林施業に関

表2-6-2. 第3期試験計画期間中(2002(平成14)～2011(平成23)年)に行われた学生実習学部実習

大学・学部	学科／専修	のべ人数	科目名
東京大学・農学部	森林学科	26	森林風景計画学実習
東京大学・農学部	森林系専修	157	環境設計演習
東京大学・農学部	フィールド科学専修	52	森園管理学実習
東京大学・農学部	森林系専修	183	森林動物学実験
東京大学・教養学部	全科類	24	全学自由研究ゼミナール
東京大学・教養学部	全科類	85	全学体験ゼミナール(3件)
東京大学・教養学部	全科類	28	全学体験ゼミナール 「年輪を読む」
東京大学・教養学部	全科類	104	全学体験ゼミナール 「森に学ぶ(2)-森林の保健休養機能」
東京大学・教養学部	全科類	40	全学体験ゼミナール 「森のエネルギーを使いこなす」
東京大学・教養学部	全科類	38	全学体験ゼミナール「キノコに親しむ」
東京大学・教養学部	全科類	68	総合科目D「森林-人間系の科学」
東京大学・教養学部	全科類	151	総合科目D「森をはかる」
東京大学・工学部	土木学科	474	測量学実習
東京大学・工学部	社会基盤学科	1589	フィールド実習
東京大学・工学部	生物学科	196	生態学野外実習 I
静岡大学・理学部	生物地球環境科学科	8	野外実習
東邦大学・理学部	生物学科	188	生態学実習
東邦大学・理学部	生物学科	72	野外実習
東邦大学・理学部	生物学科	240	野外基礎実習
都留文科大学・社会学科	環境・コミュニティ創造専攻	96	地域資源管理・環境保全実習
合計		3819	
大学院実習			
大学・研究科	専攻	のべ人数	科目名
東京大学・農学生命科学研究科	生圏システム学専攻	12	森林生態圏管理学特論
合計		12	

表2-6-3. 第3期試験計画期間中(2002(平成14)～2011(平成23)年)の利用状況

機関	機関数	利用者数	主な利用目的
大学・大学院	15	10,087	研究調査,実習,合宿,研修
高等学校	1	120	ヨット大会開催
中学校	5	2,566	野外活動,オリエンテーリング
小学校	18	9,061	自然観察,体験学習,散策,写生
幼稚園・保育園	7	5,781	レクリエーション,自然観察,課外保育
その他	109	173,452	自然観察,調査研究,見学,山中湖村開催イベントの会場として
合計		201,067	

する研究(同75, 82, 121), 森林景観の評価に関する研究(同80), 富士演習林および周辺の環境を活用したツーリズムや森林教育に関する研究(同79, 84, 86, 87, 88, 90, 98, 104, 105, 113, 119, 125)が行われた。自然環境データについては, 長期生態系プロットに関する報告(同65, 93), 林内に生息する鳥類に関する研究報告(同64, 102), 林内に産する変形菌類に関する報告(同89, 99)がなされた。ブナの産地試験地等を利用したブナの地理変異や更新動態に関する研究(同73, 74, 81, 92, 112, 118), 樹木の水分生理に関する研究(同69, 100, 107, 108, 109, 120)に関する研究が行われた。また, 寒地性樹種育成試験の長期的な実験結果が報告された(同91, 115, 126)。その他, 森林地区に金属を暴露して, その腐朽の進行程度を調べるようなユニークな研究も行われている(同116)。

第3節 富士癒しの森研究所の担うべき役割

富士癒しの森研究所の最大の特徴は、保養地としての素地に恵まれた立地にあることである。また保養地のみならず一般地域の住民にとっても、森林の公益的機能の1つとして、森林の保健休養機能への期待も高まってきている。本研究所が「癒しの森」を考究することは、その立地に適合するばかりでなく、当地域をはじめとして森林の保健休養機能に期待を寄せる地域・団体に知見を提供するものとして社会的意義が大きい。

前身の富士演習林では、森林の保健休養機能に関しては、景観に配慮した施業方法や、景観の評価、森林体験の提供方法など、基礎的な研究に重点が置かれ、多くの知見が蓄積されてきた。これらの蓄積を踏まえ、本研究所は、自律的に「癒しの森」を生み出し享受する地域協働型の社会・仕組みを構築する応用研究へと踏み出す段階に来ているといえよう。社会への働きかけも視野に入れた「癒しの森」の応用研究に踏み出していくことは、富士演習林創立当時に地元社会である山中湖村が地域の発展を願って東京大学に対して好意的に土地を提供した経緯を鑑みても意義深いことである。

したがって、本研究所は単なる研究機関というよりも、山林を保有し、それらを実験的に操作できるという大きな特徴をもつことを今一度認識する必要がある。管理下にある山林は、「癒しの森」研究の実践・実証の場として活用することができる。特に、「癒しの森」を創りながら、その過程で産出される木材を燃料などの形で有効利用する仕組みを実践・実証することは、社会的にも大きな貢献になる。地域内で資源を循環的に利用しつつ「癒しの森」を創ることを念頭に保有山林を活用することは、本研究所が担うべき重要な役割である。

さらに、本研究所は、前述した通り都心から近く、傾斜も緩やかであることから、多くの人に対して気軽に森林体験をしてもらえるフィールドという特徴をもつ。事実、第3期試験研究計画における取組みを通じ、初歩的な森林教育の場として有効なフィールドであること、また、学内向けにも保健休養の場として大きな需要があることが明らかになっている。森林あるいは演習林に興味を抱いていなかった人々に対して、森林の機能や森林と人間の関わり、演習林の存在について発信するうえで、好適な位置にあるといえる。いわば、「演習林の広告塔」ともいうべき役割を担うことは、本研究所に課せられた重要な課題の1つである。

第2章 計画

第3期後半より人員が拡充されたものの、絶対数としては依然として極めて小規模な組織である。一方で、「演習林の広告塔」の役割を果たすには、少ない人員で効果的な活動を行うための特段の工夫が必要である。本期では、以下のような方針のもとに、事業を計画する。

第一に、富士癒しの森研究所として、森林の保健休養機能の追求に特化し、これまでの継承業

務を縮小もしくは、本務に関連付けるものとして再編成する。

第二に、研究・教育・社会貢献の諸課題に対し個々にエフォートを割くのではなく、複数の位置付けを兼ねる業務として計画を立てる。この点が、本期における計画の最大の特徴である。研究：教育：社会貢献のエフォート比率は、4：3：3として研究に最重点を置き、そのテーマを地域社会との連携を視野に入れたものとするこゝで、研究活動が同時に教育活動、社会貢献活動としての成果を併せ持つことを想定している。

第三に、本研究所が掲げる研究テーマの遂行に当たり、本研究所メンバーだけでなく秩父演習林をはじめとして他の地方演習林スタッフや外部研究者の協力も適宜得られるような協力体制を強化する。特に、外部研究者に対する積極的な共同研究の提案、外部研究者が参入しやすいような林分および情報の整備を行う。

ここで、本章の構成について素描する。第2章第1節研究計画では、社会貢献、社会教育を前提とした本研究所の研究計画を示す。社会貢献についてはあくまでこの範疇で行う計画であり、特に項目を設けない。第2章第2節教育計画では、大学教育について重点的に述べ、社会教育については既述のため簡単にとどめる。本期の研究計画の遂行のための林内整備を効率的に行う観点から、第2章第3節施業計画を示す。また、本研究所の取り組みを間接的に支援するものとして、第2章第4節広報活動において、成果の発信や研究者等の来訪を呼び込むための方策を述べる。さらに、従来の連携業務を本研究所の研究・教育を充実させる視点から、第2章第5節運動会・山中寮との連携を計画する。最後に、第2章第6節管理計画として、本研究所の設備・人員の整備、外部との協力体制、安全管理のあり方について触れる。

第1節 研究計画

本期における研究は「地域内における循環的な森林利用を軸とした「癒しの森」づくり（通称：地域循環型「癒しの森」プロジェクト）」として実施する。このプロジェクトの遂行は、上述したように、研究のみならず、教育および社会貢献の成果として帰結するものである。プロジェクトの概念図を図2-6-2に示す。

背景と目的

近年、山村地域では森林所有者が十分な森林管理をしきれず、荒廃している森林をしばしば目にする。一方、森林に求める“癒し”効果への期待は年々高まっている。特に富士癒しの森研究所のおかれた山中湖村およびその周辺地域は、保養地としての性格を強く持つため、森林がもたらす“癒し”効果への期待が強い。

富士演習林では、第1期試験研究計画より、森林の保健休養機能の追求に重点を置き、特に森林景観の創造（維持）および効用について知見を蓄積してきた。その過程で、施業方法と景観の



図2-6-2. 地域循環型「癒しの森」プロジェクトの概念図

相関関係が明らかになりつつある一方で、快適な景観を維持・創造し続けるには、相当の人的コストが必要であること、その中でも特に除間伐木の処理が負担になってくるという施業上の課題を明らかにできた。今期は、これまでの知見を地域社会および社会一般に還元するため、社会の中で森林整備が円滑に進むための仕組みづくりを構築する段階に来ている。

地域社会全体で“癒し”効果の高い森林を創り、維持するためには、上記で指摘した2点の課題を克服する必要がある。そこで、本研究計画では、除間伐材を地域で有効利用し（地産地消）、施業にかかるコストをカバーすることを基本的な枠組みとし、薪や木質ペレット、ベンチなどの中低質材の有効利用と一体となった森林整備の仕組みに着目する。

もし、薪や木質ペレットなどを生産するという実益を兼ねた森林管理によって、森林の保健休養機能が高度に発揮されれば、森林所有者と地域住民が森林という場所を通じて、互いに高い利益を受けることができるようになると思われる。本プロジェクトでは、富士演習林がこれまで行ってきた保健休養を高めるための森林管理法をベースとして、地域循環型の「癒しの森」づくりのあり方を新たに提案し、地域にその成果を提供することを目指す。

(1) 【機能】癒しの森林空間の分析と創造

本プロジェクトでは、癒し効果の高い森林空間を創造し、東京大学の学生、大学院生、東京大学教職員、一般市民の健康増進に貢献する。また、近年では、空間そのものだけでなく、森林体験そのものに癒し効果があることが指摘されていることを鑑み、本計画では、本研究所における

下刈、除伐等の森林管理作業、フットパス、休憩空間等の整備作業がもたらす森林セラピー効果を検証する。また、本研究所の前身である富士演習林がこれまで行ってきた森林の保健休養機能や景観林施業に関する試験・研究を再評価し、その知見を地域森林に応用するための体系化を行う。

森林の機能の1つとして挙げられる保健休養機能は、森林と人間との相互作用によって発揮されるものである。これまでも、相互作用の結果としてもたらされる人間の安らぎや健康を測定し、保健休養機能の存在を確かめる研究は多く存在する。また、保健休養機能を発揮する森林がどのような要素で構成されるのかについて観測する研究も同様に盛んである。しかしながら、森林と人間の相互作用そのものに焦点を当てると、物質のやりとりだけではなく、情報として捉えられるべき人間の感覚や認識さらには知識や過去の経験が及ぼす作用、また人間の運動による森林からのフィードバック、たとえば落葉を踏みしめる足音なども考慮する必要がある、未だ解明すべき課題が山積しているといえる。今期の計画では、従前より保健休養のための景観施業を行ってきた森林を活かし、いくつかの手入れや構成樹種などの違う森林を仕立てることや、森林体験メニューおよび林内散策コースの整備を行い、繰り返し実験を行える環境を整備する。また実験フィールドの基本的なデータ（立木位置や気象など）を整備し積極的に公開することで、幅広い分野の研究の参入を促す。研究方法としては、実験フィールドにおける人間の行動や生理的な反応の調査、内観などの心理学的な観測を行うとともに、メディアを通した森林と人間の相互作用を観察することによって、特に森林と人間の情報における相互作用を明らかにする。

（a）癒しの森林空間の評価

森林空間での体験活動による精神的効果を評価する。特に体験活動の内容と体験者の属性の関係に注目する。森林医学の専門家との共同研究の可能性を模索する。

（b）森林空間における新たな癒し機能の開拓

森林空間もしくは森林の素材を利用して、フットパスや東屋など人工的な要素の強い空間も創造することができる。その整備に関わる活動および、空間利用について、作業療法、景観評価の観点から癒し効果の評価を行う。

（c）癒しの森施業の体系化

関連する専門家との共同研究から、森林の保健休養機能および風致施業を説明するための枠組みを構築する。

（d）メディアを通した森林と人間の相互作用の解明

映像やヴァーチャルリアリティなどのメディアを利用することで情報化した森林実験フィールドを整備し、情報空間における人間の受け取る情報や反応についての調査を行い、情報の観点から森林が人間に与える癒し効果のメカニズムを明らかにする。

(2) 【技術】地域に適合した木材利用システムの構築

地域住民が伐採、搬出から加工まで、安全かつ効率的にできる仕組みを構築する。まず、本研究において、安全に搬出するためのロープウインチを導入し、さらに燃材利用に焦点を置き、薪割り機、チップパー、ペレット生成機等のプラント、薪・ペレットストーブを導入し、林業の専門家でなくても林内整備と燃材生産が可能となる一連のシステムを確立する。また、I林班に実証林を設定し、どのような森林管理が最も効率的に薪やペレットを生産でき、かつ、癒し効果の高い空間になるかについての実証研究を行う。

(a) 安全かつ簡易な伐採・搬出・加工技術の検討

実証林において、施業を行う際にロープウインチ、薪・ペレット成型プラントを導入し、作業時間、労働負荷や安全性を評価する。

(b) 資源特性の評価

薪・ペレットストーブを導入し、林内より得た各種燃料（樹種、加工状態）の燃焼特性（燃焼温度、燃焼時間、メンテナンス作業の難易）について実証試験を行う。

(c) 作業効率およびコストの評価

地域循環型の森林整備を想定した場合の作業コストおよび各種燃材の生産性を比較検討するため、実証林を利用し実証研究を行う。

(3) 【社会】「癒しの森」づくりの地域社会への普及

地域において森林整備が進まない現象は、一種のCPRs (common-pool resources) をめぐるジレンマ問題と位置付けることができる。つまり、森林所有者はその利害（＝施業によるコスト負担を避ける行動）によって社会全体の利益（＝保養地空間としての価値）が損なわれるという問題の構図がある。

一般にCPRsのジレンマを克服する仕組みとして、入会林野などに代表されるコモンズ（共同的な資源管理制度）が知られているが、既知の成功事例および説明原理の多くは社会構成主体の同質性を前提としていた。一方で、現代において一般的に見られる地域社会は、すでに分業化および流動化が進んだ、異質性の高い社会である。こうした異質性の高い社会を前提として集合行為が成立する要因を探ることは、世界的な政策的・学問的課題として着目されている。

本期においては「森林の保健休養機能」を地域社会の全体益として位置づけなおしたうえで、これを創造（維持）するための社会的仕組みづくりについて研究を行う。具体的には、森林管理に関して権限を持つ森林所有者である旧住民と、薪やペレットの原料を需要する別荘地の新住民が連携・共同することによって、地域資源が有効利用され、そのことによって風致施業が自律的に展開する仕組み、換言すれば、利害の異なる主体（異質性の高い社会）が全体益を生み出す仕組みを考究・提案する。

このための研究方法として、アクション・リサーチ法を採用する。地域への仕組みの定着のプロセスとして、①異質な主体間における共通認識の醸成→②協議・交流の場の創出→③各主体の特性に応じた協働関係の構築、という展開を想定する。地域住民向けの公開講座やワークショップを実施し、その技術、仕組みを理解してもらう。さらに、地域における人的ネットワークの醸成も支援する。これらの「仕掛け（アクション）」に対し、どのような成果が得られたのか、主体による反応の違いなどを把握し、「癒しの森」を作る仕組みづくりを構築する上での要因を分析する。

（a）公開講座・ワークショップの実施

立場や経験の異なる主体間で「癒しの森づくり」が持つ可能性について認識を共有することを目的とし、地域住民、および地域で働く人々を対象とした公開講座やワークショップを開催する。参加者にアンケート調査を行い、主体による選好の違いや経験の違いを把握する。

（b）地域人材の育成、人的ネットワークの醸成

立場の違う者同士が共通の認識に立ったうえで、どのような協業関係を結ぶことが適切であるかを探るため、協議・交流する場をコーディネートする。協議の状況の観察、参加者への聞き取り調査を行う。また、「癒しの森づくり」に適した技術をもつ地域人材の育成も図る。

（c）環境ガバナンス研究の推進

上記のような試みの中で把握されたデータ、および観察された人間関係の変化から、異質性の高い社会における環境ガバナンス問題の分析を深め、地域の環境資源および人的資源の特性に応じた「癒しの森づくり」の仕組みを整理する。

（4）試験林等の継承と再編成

第3期試験研究期間内に30あった試験地を整理して、表2-6-4のように13にまで絞り込んだ。これらのうち、寒地性樹種育林試験地（試験地001-006）と植栽試験地（007）は、適宜、間伐を行い、その施業履歴を記録し、人工林試験地として維持する。カラマツ系統別試験地（008）、クローン植栽地（010）、産地別試験地（013）については、必要に応じて間伐を行うが、系統やクローンを確保できるように留意する（図2-6-3）。

長期生態系プロットは、1999（平成11）年設定のこれまでのプロット（LTER-1：50m×50m）に、面積を拡大する目的で隣接する（末尾文献番号63）で設置したプロット（LTER-2A、LTER-2B：各50m×50m）を2009（平成21）年に追加設定した。LTER-1は、2009（平成21）年に環境省モニタリングサイト1000のコアサイトである秩父演習林の1プロットの位置付けとなった。翌年の2010（平成22）年には、モニタリングサイト1000運営上の混乱が生じる可能性があることから、準コアサイト扱いになったが、連絡調整や報告といった作業は、秩父演習林が窓口となる。LTER-2A・2Bについては、富士癒しの森研究所の独自の調査地の扱いのみである。

表2-6-4. 試験地, 見本林等一覧

試験地							
番号	試験地名称	林班	小班	面積	樹種	設定年	備考
001	寒地性樹種育林試験地	III	13	0.38	ヨーロッパトウヒ	1956	旧試験地番号7
002	寒地性樹種育林試験地	III	13	0.38	ストロブマツ	1956	旧試験地番号8
003	寒地性樹種育林試験地	III	13	0.38	ウラジロモミ	1956	旧試験地番号9
004	寒地性樹種育林試験地	III	13	0.38	トドマツ	1956	旧試験地番号10
005	寒地性樹種育林試験地	III	13	0.38	アカエゾマツ	1957	旧試験地番号11
006	寒地性樹種育林試験地	III	13	0.38	シラベ	1967	旧試験地番号27
007	植栽試験地	III	13	0.08	チョウセンゴヨウマツ	1965	旧試験地番号32
008	カラマツ系統別試験地	III	12	0.75	カラマツ	1965	旧試験地番号22
009	クローン植栽地	III	11	0.65	カラマツ	1964	旧試験地番号25
010	聖ヒノキ植栽試験地	I	5	0.07	ヒノキ	1990	旧試験地番号37
011	ブナ産地別試験地	I	2		ブナ		
012	長期生態系プロット	III	3	0.25	カラマツ, 広葉樹	1999	
013	産地別試験地	III	12	0.17	ヒノキ	1975	旧試験地番号28
014	長期生態系プロット(2)	III	3	0.25	カラマツ, 広葉樹		

見本林リスト

番号	名称	林班	小班	面積	樹種	設定年	備考
101	寒地性樹種見本林	III	13	0.04	エゾマツ他	1957	旧試験地番号12
102	ヤチダモ見本林	III	6	0.26	ヤチダモ	1956	旧試験地番号14
103	スギ見本林	II	3	0.03	スギ	1972	旧試験地番号35c

展示林リスト

番号	名称	林班	小班	面積	樹種	設定年	備考
201	風致林施業展示林	I	2,3				
202	風致林施業展示林	II	1	1.89	カラマツ・アカマツ	1913-1950	
203	風致林施業展示林	II	2	1.73	カラマツ・アカマツ	1913-1950	
204	風致林施業展示林	II	4	0.92	カラマツ	1913	
205	風致林施業展示林	III	12	0.25	シラカンバ	1964	旧試験地番号17
206	風致林施業展示林	III	12	0.25	ダケカンバ	1964	旧試験地番号18
207	風致林施業展示林	II			草本		古在ヶ原
208	風致林施業展示林	II			芝生		湖畔広場

その他リスト

番号	名称	林班	小班	面積	樹種	設定年	備考
301	カラマツ精英樹保護林	III	12				
302	林間苗畑	I	5				

人為的な攪乱を極力排除して自然の遷移に任せた状態で5年ごとの定期調査を秩父演習林との協力によって実施する(本計画期間内は2014(平成26)年と2019(平成31)年)。

その他の試験地については, 特に刈払い, 除・間伐等の予定は設けないが, 試験地の状態を定期的に見ながらその取り扱いを検討する。

見本林・展示林等については, 取り扱いからが不明確だった湖畔広場(II-1), 古在ヶ原(II-5)を景観展示林として再設定し, 見本や展示効果を十分に発揮できるよう, 必要に応じて適宜, 維持管理作業(刈払い, 除・間伐等)を実施していく。

第2節 教育計画

(1) 大学の実習/演習の支援

本研究の特質を活かした東京大学農学部および大学院農学生命科学研究科の実習の受け入れを継続して行うための演習林機能を継続して維持管理するとともに, さらなる実習の質の向上を

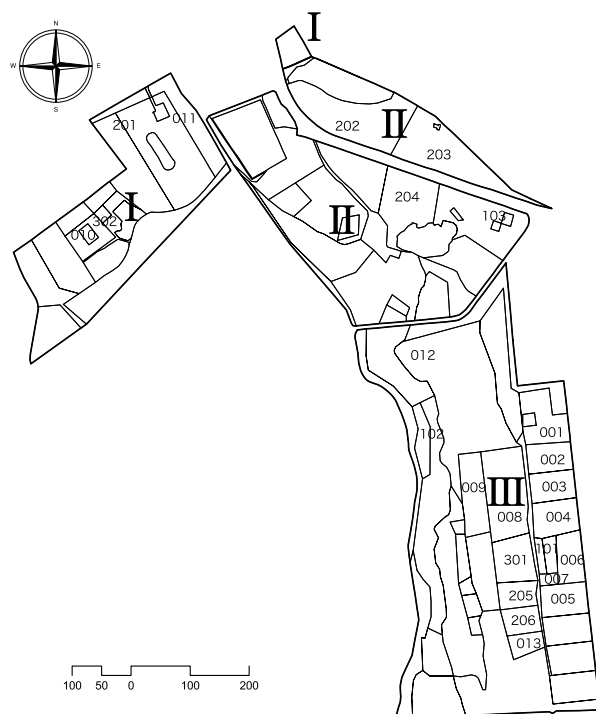


図 2 - 6 - 3. 試験地位置図

目指し、基盤データ整備と提供、施設管理上の協力、実習の内容に対する提案を行う。

(2) 地域循環型「癒しの森」プロジェクトに連動した幅広い教育活動

地域循環型「癒しの森」プロジェクトによる研究成果を教育活動を通して社会へ還元するとともに、プロジェクト遂行の現場に積極的に学生を呼び込むことによる教育活動を展開する。

- ・関連する研究室と連携を取り、卒業研究のフィールドおよびテーマを提供する。
- ・プロジェクトに関連する学問領域について、年1コマ程度の教養学部講義を開講し、人材を育成する。
- ・大学以外の機関の実習や研修利用を積極的に受け入れ、プロジェクトの成果を反映した実習／研修メニューおよびコースの提案を行う。
- ・関連する技術と学問の地域への啓蒙、普及のため、地域の学校教育への参画とセミナーやワークショップなどの社会人教育活動を行う。

第3節 施業計画

本研究所の森林は、基本的には育成段階を過ぎたカラマツ人工林が主である。第4期の期間内においても景観への影響が大きいと考えられる皆伐、新植は基本的に行わず、現在までに形成さ

れてきた森林の整備に重点をおくこととする。今後の小班の取り扱いに関しては表2-6-5のとおりであり、年次計画については別途アクションプランを定める。

最優先の項目としては、第2章第1節 研究計画にある地域循環型「癒しの森」プロジェクトを实践するための核となる実証林の整備が挙げられる。具体的には、実際に本研究所の施業として位置付け、I林班内のI-1、I-2、I-3、I-4、I-7、I-8、I-9の除伐、間伐作業を実施する(図2-6-4)。各作業においては、外注も検討しながら、選木から伐採、ポータブルウインチ等を用いての材の搬出までを行っていく。

表2-6-5. 各小班の取り扱い

小 班	内 容
I-1	フェンス際を幅1mで毎年刈り払う
I-2	事務所周辺、歩道、車道脇を毎年刈り払う
I-3	実証林計画、苗畑計画に準じる 歩道は毎年刈り払う
I-4	実証林計画、苗畑計画に準じる 歩道は毎年刈り払う
I-5	聖ヒノキ試験地
I-6	苗畑
I-7	実証林を設定し、3～5年に1回除間伐を実施する
I-8	実証林を設定し、3～5年に1回除間伐を実施する
I-9	実証林を設定し、3～5年に1回除間伐を実施する
I-10	本期間中にカラマツ主間伐を実施する 湖畔広場とのつながり 伐採、搬出イベントを企画する
II-1	毎年5～9月に湖畔広場の芝刈りを実施する 湖畔広場以外は、歩道や広場に接している周辺部の除伐を実施する 枯損木処理を5年に1回実施する
II-2	毎年歩道の刈り払いを実施する
II-3,4	スギ見本林 山中寮入口周辺を外注によって毎年刈り払う キノコの発生を考慮し10小班と合わせて刈り払いを実施する
II-4	風致林施業展示林
II-5	景観維持を目的に古在ヶ原の刈り払いを実施する
II-6	毎年5～7月、9月にグラウンドの芝刈りを実施する グラウンド周辺部の除伐を3年に1回実施する
II-7	全域ではなくアカマツ林内に施業あり／なし区域を設定し、施業効果をPRする 施業あり区は毎年刈り払いを実施する
II-8	自炊宿舎の周辺を伐採する
II-9	山中寮、施業は行わない
II-10	毎年、一部をキノコの発生を考慮した刈り払いを行う
II-11	複層林は燃料材として処理する 本計画期間中に1回、木質燃料関連イベントを開催する
II-12	ブナ人工林は維持していく 必要に応じて除間伐するが、基本的に施業は行わない
II-13	施業は行わない
II-14	施業は行わない
II-3,6,10,11,12,14	林縁部は境界維持、交通への配慮を意識し、大径木を対象に支障木除去を進めていく
II-1,2,3,4,5,6	国道沿いは、境界維持、交通の確保に配慮し小径木、草本を対象に刈り払いを実施する 灌木の植栽等も検討して行く
III-1	主に広葉樹の除伐を本計画期間中に1回実施できるように検討していく
III-2	樹木園は現状を維持し、樹木園以外は3年に1回刈り払いを確実に実施する
III-3	長期天然林プロットを含んでおり、基本的に施業は行わない 放置林としてIII-2と対比させる
III-4	施業は行わない
III-5	林縁部を対象にフットパス整備計画を検討していく ヒノキは伐採する
III-6	ヤチダモ見本林は維持する III-5同様にフットパス整備計画を検討していく
III-7	フットパス整備計画を検討していく
III-8	販売(立木販売)を視野に置いて間伐を実施する 本計画期間中の早い時期に選木を完了させる
III-9	小班を樹種別に再設定する 優先度は高くないが、除伐を実施する
III-10	シラベは間伐を検討していく
III-11	クローン試験地 シオジ林は下刈り ブナ、ミズナラは刈り払いを実施する
III-12	カラマツ系統別試験地 シラカバ林は更新する方向で検討を進めていく
III-13	適宜間伐を実施する
III-14	ヒノキ林は間伐を検討していく

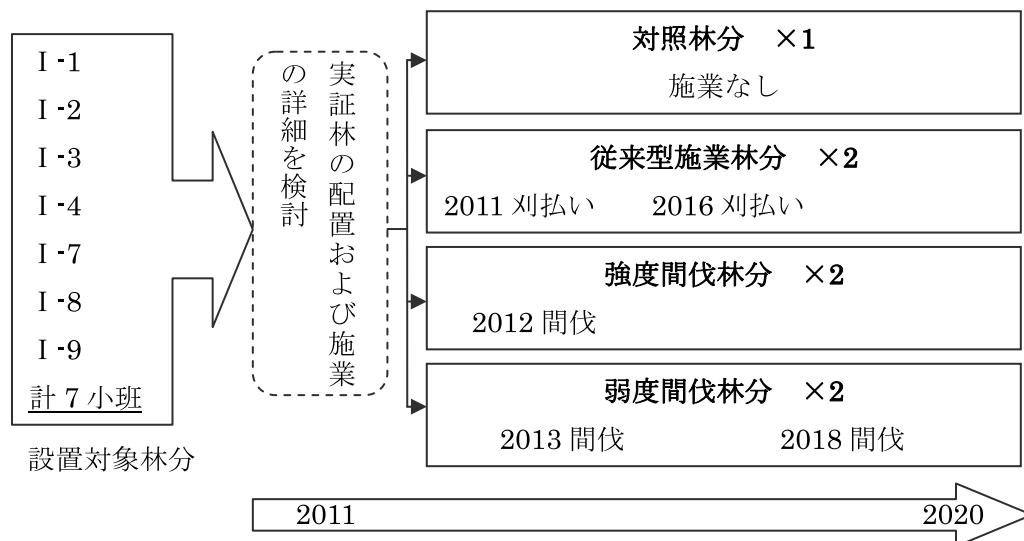


図2-6-4. 実証林の整備・施業行程

第3期試験研究計画までに行われてきた景観を意識した施業は、今期においても重要な施業と位置付け、継続する。しかし、人員や予算の縮小を配慮し、該当する林床の刈払い、劣勢木、枯損木の伐採といった作業は、事務所周辺およびフェンス回り (I-1, 2), 山中寮周辺 (II-2), 湖畔広場 (芝刈II-1, II-2, II-3, II-4), 古在ヶ原 (II-5) 車道沿い (II-5, II-7) などに実施区域を限定する (表2-6-5)。なお、状況によって作業の外注、または地域循環型「癒しの森」プロジェクトの一環として、学生もしくは一般の作業体験の場とすることも検討する。

III-8, III-12内には、ヒノキ人工林が設置されているが、設置してからの年数が経過した結果、混みすぎた状態となっているため、間伐を実施する必要がある。車道からの距離などから搬出経費もそれほど大きくないと予想されることから、立木販売を視野に入れた毎木調査を実施し、検討を進めていく。

本研究所におけるキノコ採集体験は、東京大学教職員特別ガイドや各種ゼミなどで定着しつつあるイベントとなっており、今期も継続して実施していく予定である。特に、キノコ資源確保のための刈払いをII-10において実施する。

既存の歩道は、施業においても、また、各種試験研究、教育活動、社会連携において、本研究所の重要な基盤であるといえる。安全を確保するためにも刈払いは継続して実施し、頭上の枯れ枝、隣接枯損木等、危険木の除去を定期的 to 実施していく。また、第2章第1節(1)で触れたフットパスは、地域住民が維持管理作業に主体的に参加する形態をとることを前提に整備計画を進めていく。車道維持については、これまではそれほど多くの労力を割いてこなかったが、今期においては、主に外注作業として、危険木の処理、排水路の確保といった作業を継続していく。

施業によって発生した材や枝条は、燃材等として有効に活用していくことが今期の目標である。やむをえず処理しきれないものについても、林内へは極力放置せず、極積や枝条の積み方を工夫し、景観に配慮する。

さらに、GISの活用によって効率的な森林管理をはかる。具体的には、現実的な作業単位に応じて小班の単位を見直した上で、地域循環型「癒しの森」プロジェクトにおける施業に必要な情報を盛り込んだGISを整備する。

第4節 広報活動

穏やかな地形に立地する富士癒しの森研究所は、初めて森林に触れる人が森林体験をするのに最適な環境である。そのため、本研究所は「森の入り口」、「演習林の入り口」としての役割を担いうる。第4期においては、積極的な働き掛けとして、ガイドや公開講座などを企画・開催し、本研究所が重点的に取り組むプロジェクト（地域循環型「癒しの森」プロジェクト）を分かりやすく伝えると同時に、他の東京大学演習林の存在や特徴、森林の機能や望ましい森林と人間の関わりなどを伝える。また、不特定多数の来訪者や社会一般に対して、森林をより身近なものとして感じることをできるよう、情報基盤を整備する。

(1) ガイド、公開講座等のイベント活動

東京大学教職員向けの特別ガイドを実施し、まずは本学の教職員に本研究所ならびに東京大学演習林の存在とその意義を知ってもらう。これらのガイドについては、「弥生」、「学内広報」等の学内の情報誌にも積極的に投稿し、その成果を広くアピールする。また、本研究所の周辺地域住民（森林所有者と別荘住民の両方を含む）、もしくは広く一般市民を対象とした公開講座を実施する。公開講座はプロジェクトの一環として位置付け、実証林における作業試験や調査等を公開する形で企画する。こうしたイベントでは、本研究所で重点的に取り組む地域循環型「癒しの森」プロジェクトを推進する中で得られた知見に基づき、参加者に森林の機能や森林との付き合い方を伝えることを目的とする。イベントの事業成果は、ホームページ、科学の森ニュース、その他の大学内の広報誌で報告するほか、地元紙や業界紙にも投稿し、その成果を地域にも還元することを目指す。

(2) 掲示・看板等の整備

本研究所は年間5,000名以上（マラソン大会での利用を除く、マラソン大会の申請人数は23,000名）の一般利用があるが、湖畔広場や森林内の歩道を散策するといった目的が大多数を占めると考えられる。こうした不特定多数の来訪者に対して、本研究所が保有する試験地や保健休養効果を高めるための施設の解説、森林に関する知識に関する解説を行うための掲示板および看

板を整備する。これらは、湖畔広場、および一般道からの入口を重点的に整備する。2010（平成22）年度に新たな看板を11ヶ所設置したが、具体的な内容については早急に検討し、本計画の初期に整備する必要がある。

（３）ウェブサイト等の利用

ウェブサイトは携帯端末でも表示しやすい形式に整えたうえで、利用案内、本研究所の概要と重点的に取り組むプロジェクトに関する説明、イベント等の案内や報告などを参照できるようにする。また、本研究所の研究利用を促進するための研究者向け情報として、試験地データの公開等も検討していく必要がある。気象や林内に関する状況など速報性の高い情報を潜在的な利用者に伝えるものとして、現行のブログを活用するほか、リアルタイムでの情報提供も検討する。

第５節 山中寮内藤セミナーハウスおよび東京大学運動会との連携

（１）山中寮内藤セミナーハウス

1929（昭和4）年に造営された山中寮は、2009（平成21）年7月に山中寮内藤セミナーハウスとしてリニューアルオープンした。旧山中寮では冬期の営業は行っていなかったが、リニューアル後は通年で宿泊可能となった。その新しさや快適さに伴い、最近では多様な利用がなされている。寮内には、収容人数の大きいホールや会議室等の設備もあるため、運動部学生や教育実習生の宿泊だけでなく、さまざまな会議、学会活動、各種イベント、教職員の保健休養など、幅広い活用がなされている。

本研究所としても、所内にこのように快適な宿泊施設が併設されていることは大きなメリットであり、来訪者を「癒す」という観点からも重要な存在であると位置づけることができる。そこで、富士癒しの森研究所と山中寮の利用を促進するために、研究室単位での山中寮における「ゼミ合宿」と本研究所職員による「癒しの森ガイド」の企画を本研究所と総務部の合同企画として立ち上げ、附属施設長会議等で紹介するなど、新たな取り組みを始めている。

山中寮の施設管理は、総務部が主体となっており、本研究所は直接関わっていないが、周辺環境整備には適宜関わっていく必要がある。特に、屋根からの排水が国道からの進入路に直接流れ込み、路面を著しく損傷する問題は、利用者に著しい不便を強いることが明らかになった。この進入路に対して、2010（平成22）年度には、本研究所の技術職員も協力し、碎石を敷くなどの応急処置を行ったが、これは一時的な処置であり、排水設備を整備するなどの抜本的な対策が必要である。また、山中寮の周囲には高木が隣接しており、万一これらの高木が倒れると、山中寮に甚大な被害をもたらす可能性がある。今後は、さらに総務部や運動会と密に連絡を取り、山中寮周りの利便性、安全性を改善できるよう、環境整備に協力する。ただし、本研究所の人的資源には限りがあるため、総務部が地元業者への作業依頼する際の手助けをするなど、協力のあり方

には工夫が必要である。また、山中寮周辺の山林は、夏期の特別開寮に合わせて、本研究所の技術職員が下刈り整備や枯損木の処理をしてきたが、今後も、特別開寮前までに林況の巡視を行い、適切な環境整備を実施する。

(2) 東京大学運動会との連携

本研究所にはグラウンド、馬場、ヨット桟橋などの運動会関連設備があるために、運動会学生による利用が多く、第3期試験計画期間では、馬術部、ラグビー部を中心に1,100名を超えている(表2-6-6)。運動会の活動支援については、これまで技術職員を中心に、主にグラウンドの芝刈り、ヨット部桟橋敷設の協力、馬場の整備などの作業協力を実施してきた。一方、歴史を振り返れば、山中寮の設立当初には、山中湖村から寄付された大学有地に学生の労働によって運動場を造成し、当時の東大生が木の根を掘り、土を運び、土木工事に汗水を流した記録がある。この労働は「アルバイト・ゼンスト」とドイツ語で呼ばれ、これが後に学生アルバイトの語として一般化したと言われている。その後、運動会学生を中心とした東大生による森林整備が継続して行われたが、1986(昭和61)年を最後に、学生らによる環境整備は行われなくなった。最近では、運動会学生は、山中寮の夏期特別開寮期間には、運営管理を行うために、常時、運動会学生が山中寮に滞在しているが、本研究所の職員と直接関わる機会は希薄になっていた。

2010(平成22)年に湖畔広場の東屋が更新される際に、総務部を通じて、山中寮の特別開寮期間の管理運営を担当する運動会学生に連絡を取り、東屋の建て替え作業の協力を打診した結果、作業協力することに快く賛成してくれた。結果、2日間でのべ20名ほどの運動会学生が重いカラマツ材を運び、積み上げるなど、本研究所の職員と学生が汗水を流して働き、東屋を完成させることができた。このような共同作業は、本研究所にとっても新鮮かつ有意義なイベントであった。

山中寮内藤セミナーハウスが、運動会の単なる合宿施設ではなく、課外教育の場として企図されていることを考えれば、本研究所が目標とする「癒しの森」を一緒に創造しながら、学生が森林体験で得られる視点を研究の対象とするなど、本研究所と運動会学生の間に新しい関係を模索できる可能性がある。すなわち、今後は、本研究所の技術職員が一方的に運動会の施設整備へ作業協力を行うだけでなく、特に夏期の特別開寮期間に滞在している運動会学生を対象に、「癒しの森」づくりの一環として、ベンチやテーブルなどの休憩設備の製作、心地よい森林に誘導する

表2-6-6. 第3期試験計画期間中(2002(平成14)～2011(平成23)年)の運動会利用

年	団体名称	利用者数(人・日)
2002-2010	東京大学運動会馬術部	925
2002	東京大学運動会ラグビー部	113
2003,2007,2008	東京大学運動会	93
合計		1,131

ための森林管理作業などを積極的に企画・実施していく。

第6節 管理計画

(1) 土地管理

本研究所が保有する森林は3つの林班に区分されている。このうち、大学が所有しているのがI林班（10小班）、借入県有地がII、III林班（各14小班）である。現在の総面積は約41haである（表2-6-1）。

東京大学が所有しているI林班については林地、林木を問わず比較的容易に改変を試みることができるため、本計画においては、実証林の設定など、中心的な役割を果たす予定である。なお、I林班の10小班はII林班1小班に位置する開放的なスペース「湖畔広場」に隣接した林地であり、「湖畔広場」と一体的な管理を行う。

II林班は、前述した湖畔広場、山中寮やグラウンドなど運動会に関連する設備が多く含まれる。II林班には、施業が保健休養に及ぼす影響を体験できるように設定された風致林施業展示林やキノコの発生を促すために刈払いを行う小班（II-10）など、教育的要素が強い林班といえる。湖畔広場を中心に、不特定多数の利用がある現実を踏まえ、開かれた体験・教育空間として、安全かつ効果的に、幅広い利用者が過ごすことができるような管理方法を検討の上、実現する。

III林班は、比較的多様で多少起伏をもった地形の中に多様な森林が造成されており、試験研究利用も多い。III林班には、人為の影響を排除し、天然の状態に委ねて森林の動態を明らかにするための試験地である長期生態系プロットが含まれている（表2-6-4）。このように、林班ごとに際立った特徴があるため、こうした特徴を活かしつつ整備を進める必要がある。

なお、第1章第2節（3）「研究の成果」で触れたように、本研究所では森林の保健休養機能に関する教育研究だけでなく、本研究所が保有する森林や試験地を利用して、主に外部利用者によって、ブナなど樹木の更新動態や水分生態に関する研究も盛んに行われてきた。本計画においても、外部利用者がこれらの研究を継続できるよう十分に配慮し、森林や試験地を適切に維持管理していく。

本研究所と隣接地の境界部分については、残存する古い有刺鉄線を撤去するとともに、景観に配慮した新たな境界の明示方法を検討する必要がある。その1つとして第2章第1節（1）で触れたフットパスが考えられ、地域住民と協働する形態での管理も検討する。また、道路沿いの樹木の多くが道に向かって枝を伸ばしており、歩行や車両通行の邪魔になっているところが散見される。これらについては、枝降ろしや伐採を計画的に行う必要がある。

(2) 施設等の管理と整備

本研究所が現在保有する施設（運動会施設を除く）には、事務所、長期滞在宿舎、作事場（2010

(平成22)年度に事務所わきに新築), セミナーハウス(これまで作事場として利用), 野外トイレがある。事務所は2009(平成21)年に増築されて, 現在の形となった。これらのうち, 長期滞在宿舎は本研究所を起点として, 本研究所ならびに富士山山麓など周辺地域で長期的な研究を行う学生の経済的な負担を減らす上で極めて重要な存在である。宿舎の内部は, 既に改装が行われ, 居住性の向上が図られている。ただし, 周囲の高木の枝が宿舎の屋根の上にせり出しているため, 今後は, 高所作業車を利用して枝を払う, あるいは高木そのものを伐採するなどといった措置が必要である。また, これまで作事場として利用していたセミナーハウスは, 今後, 重点的に取り組むプロジェクトの中で生産される薪材等の貯木場としての機能を持たせる必要がある。

保健休養効果を高めるための設備として, 前述した通り, 2010(平成22)年度に湖畔広場の東屋が更新された。この東屋は, 湖畔広場を訪れる人々が, 日差しを避けて休憩できるスペースであるというだけでなく, 本研究所の森林を整備する中で得られたカラマツ間伐材を玉切り, その壁に有効活用しているという特殊な設計となっている。運動会学生らの手によって壁に敷き詰められたカラマツ材は, 緊急時に燃材としても利用することができ, こうした森林資源の有効活用の具体的なあり方を提案する存在にもなっている。経過を観察のうえ, 壁の丸太を更新するなど, 適宜メンテナンス作業を行う。

またIII林班には, これまで林内産間伐材を用いた富士山景観観測塔があり, 来訪者に対して, 林内から富士山を眺望するという楽しみを提供してきた。しかし, 観測塔の前にある1965(昭和40)年に植栽したグイマツ(試験地番号008)が成長したため, 現在では, 富士山の全体は見ることができず, グイマツのこずえの上にわずかに富士山を望むことができるような状態になっている。また, 使用した間伐材が老朽化しつつあるため, 安全の面から考えても, この観測塔の取り扱いについては今後の検討が必要である。

本教育研究計画において重点的に取り組むプロジェクトを効果的に実現するためには, これまでに整備してきたチップパー, ロープウインチなどのほかに, 薪やペレットを生成するための破砕機, 乾燥機, ペレタイザー, 薪やペレットを燃材とする各種ストーブなどの備品を新たに導入する必要がある。これらの中には, ペレタイザーなど比較的高額な備品も含まれるため, 運営費だけでなく, 科研費等の外部資金, 寄付金等を獲得し, 順次整備を行っていく必要がある。

(3) 教職員組織

本研究所は, 2011(平成23)年6月時点では, 教員として所長(兼務), 常勤職員として2名の助教(所長補佐と教育研究主任)が配置され, 教育研究活動を行っている。技術職員として, 技術主任(兼務), 常勤職員として技術職員2名(利用促進系と森林施業系)が配置され, 作業を分担しつつ協力する体制を取っている。事務については農学部事務, 秩父演習林が担当し, その補助を非常勤職員が行っている。また, 利用促進系補助として, 1名の非常勤職員を置いてい

る。人手を要する作業やイベント運営については、秩父演習林から定期的に協力を得られる体制を作る。それと同時に、安定した体制の整備は重点課題を実施するためにも不可欠であり、外部資金の獲得による人員確保も目指す。

(4) 安全衛生

東京大学での活動には、労働安全衛生法が適用される。その法律に沿って、東京大学環境安全本部および農学部環境安全管理室から本研究所での安全衛生管理について指導を受けている。本研究所で行われる教育研究活動は野外で実施されることが多いことから、環境安全本部による「野外活動における安全衛生管理・事故防止指針」を参考にさまざまな対策を講じている。

本研究所では、教育研究安全衛生マネジメントシステム (MS) の検討を職員全員によって行い、危険要因などの対策を検討し、新たな危険要因を追加してきた。教育研究安全衛生マネジメントシステムの評価も同様の取り組みを行い全員が共通認識を持ち、教育研究安全意識の向上を目指している。

本研究所で日々行われている森林管理作業には、立木の伐採、搬出、刈払いなど危険度の高い作業も含まれている。毎日の作業では、ツールボックスミーティングを適時に行い安全作業への意識を高めることに努め、用具、機械類の手入れや整理整頓に注意を払っている。

附表

沿革年表

富士演習林略年表

大正14年(1925)	11月	浅間神社社有地および高村靖氏ほか144名の個人所有地の寄付申込を受ける
大正14年(1925)	11月	富士演習林設立
大正15年(1926)	8月	演習林事務所と苗畑6ヶ所完成
大正15年(19256)	12月	村民の好意と理解により部分林分収入権放棄 山梨県より県有地の貸与を受ける
昭和 2年(1927)		
～昭和10年(1935)		I林班にカラマツの植林
昭和 4年(1929)		II林班にカラマツ生長測定地を設定 東大運動会所属山中寮開設
昭和10年(1935)	3月	高山植物見本園と薬草園設置計画がたてられる
	8～11月	高山植物園と高山植物管理舎の建設
昭和10年(1935)頃		樹木園整備始まる
昭和25年(1950)頃		樹木園ほぼ完成
昭和29年(1954)		山梨県林業試験場安藤愛治ら寒冷地樹種育苗育林試験企画
昭和30年(1955)		寒地性樹種育林試験開始
昭和35年(1960)		中野村中学校用地として約3haを譲渡
昭和46年(1971)		森林の保健休養に関する研究開始
昭和54年(1979)	8月	山中湖村に役場庁舎用の売払
昭和57年(1982)		第1期試験研究計画実施
昭和61年(1986)	8月	富士演習林の一部が山梨国体のヨット会場として利用される
平成 3年(1991)	12月	I林班に管理事務所新築
平成 4年(1992)		第2期試験研究計画実施
平成14年(2002)		第3期試験研究計画実施
平成21年(2009)		山中寮改築
平成23年(2011)		I林班に作事場新築
		第4期教育研究計画実施 富士癒しの森研究所に名称変更

「富士演習林第3期試験研究計画」および「東京大学富士演習林の80年-軌跡と未来-」より抜粋、追記

参考文献

- ・山中寮史編集委員会（1998）「東京大学山中寮七十年史」東京大学運動会山中寮委員会
- ・東京大学農学生命科学研究科附属演習林（2004, 2005, 2006, 2007, 2008, 2009, 2010）演習林年報
- ・東京大学演習林出版局（2005）「東京大学富士演習林の80年軌跡と未来」富士演習林創設八十周年記念事業企画委員会

文献

本章には、1988（昭和63）年以降の本研究所に関連する研究、その他を掲載した。なお、1988（昭和63）年～2001（平成13）年の研究に関しては「富士演習林第3期試験研究計画」に記載があるが、漏れがあるため、補完のうえ再掲載し、行末に＊印を付した。1933（昭和8）～1987（昭和62）年については、既に「富士演習林を利用して行われた試験研究目録（1933年～1987年）」として発行されている。

1. 熊谷洋一・堀 繁（1988）小メッシュによる森林レクリエーション・景観計画のための地形樹木データの整理，東大演報，79，147-158*.
2. 東京大学農学部附属演習林（1988）富士演習林気象報告（自昭和59年至昭和60年），演習林，25，113-119*.
3. 東京大学農学部附属演習林（1988）富士演習林を利用して行われた試験研究目録（1933-1987），117-124*.
4. 馬場勝馬（1988）アカマツ林育林試験，昭和62年度山梨林業技術センター事業報告，30*.
5. 馬場勝馬（1988）寒地性樹種の育林試験，昭和62年度山梨林業技術センター事業報告，31*.
6. 山中湖村教育委員会（1988）山中湖村月別気象表，昭和63年度山中湖村教育要覧，7*.
7. 永島初義・千島茂（1989）富士演習林「寒地性樹種育林試験地」におけるトドマツの成長過程，平成元年度試験研究会議報告，33-45*.
8. 馬場勝馬（1989）アカマツ林育林試験，昭和63年度山梨林業技術センター事業報告，24*.
9. 馬場勝馬（1989）寒地性樹種の育林試験，昭和63年度山梨林業技術センター事業報告，25*.
10. 山中湖村教育委員会（1989）山中湖村月別気象表，平成元年度山中湖村教育要覧*.
11. 馬場勝馬（1990）アカマツ林育林試験，平成元年度山梨林業技術センター事業報告，24*.
12. 馬場勝馬（1990）寒地性樹種の育林試験，平成元年度山梨林業技術センター事業報告，25*.
13. 山中湖村教育委員会（1990）山中湖村月別気象表，平成2年度山中湖村教育要覧*.

14. 東京大学農学部附属演習林 (1991) 東京大学演習林気象月報集 (自1989年1月至1989年12月), 演習林, 28, 142-153.
15. 西山教雄・千島茂・永島初義 (1991) 寒地性樹種育林試験, ヨーロッパトウヒの成長経過, 平成2年度試験研究会議報告, 51*.
16. 馬場勝馬 (1991) 寒地性樹種の育林試験, 平成2年度山梨県林業技術センター事業報告, 22-23*.
17. 山中湖村 (1991) 8月からの降水量, 広報やまなかこ, 120, 7*.
18. 東京大学農学部附属演習林 (1992) 富士演習林気象報告 (自1985年至1989年), 演習林, 29, 141-333*.
19. 永島初義・西山教雄・千島茂・井出雄二 (1992) 富士演習林樹木園の主要樹木, 演習林, 29, 101-124*.
20. 西山教雄・千島茂・永島初義 (1992) 富士演習林ブナ人工林の成長経過, 平成3年度技術官等試験研究・研修会議報告, 51*.
21. 東京大学農学部附属演習林 (1993) 東京大学演習林気象報告 (自1991年1月至1991年12月), 演習林, 30, 235-247.
22. 東京大学農学部附属演習林富士演習林 (1993) 富士演習林第2期試験研究計画 (自平成4年度至平成13年度), 演習林, 30, 59-84.
23. 西山教雄・永島初義・千島茂 (1993) ヤチダモ人工林の成長経過, 平成4年度技術官等試験研究・研修会議報告, 45*.
24. 石原 聡 (1994) 太平洋型ブナ (*Fagus crenata*) 天然林におけるブナ当年実生の枯死要因についての研究, 東邦大学理学部卒業論文*.
25. 東京大学農学部附属演習林 (1994) 東京大学演習林気象報告 (自1992年1月至1992年12月), 演習林, 31, 133-145.
26. 南雲秀次郎 (1994) 富士演習林, 演習林, 32, 117-128.
27. 佐藤節子 (1995) ブナ (*Fagus Crenata*) の実生の生存と成長に及ぼす上層木の間伐の影響についての研究, 東邦大学理学部卒業論文*.
28. 東京大学農学部附属演習林 (1995) 東京大学演習林気象報告 (自1993年1月至1993年12月), 演習林, 33, 207-219.
29. 西山教雄・千島茂 (1995) 富士演習林ブナ人工林の成長解析—標本木の樹幹解析—, 平成6年度技術官等試験研究・研修会議報告, 43*.
30. 渡邊鈴与 (1995) ブナ (*Fagus crenata*) の天然林と人工林とにおけるアカネズミ (*Apodemus speciosus*) 個体群の動態と種子生産, 東邦大学理学部卒業論文*.
31. 東京大学農学部附属演習林 (1996) 東京大学演習林気象報告 (自1994年1月至1994年12月),

- 演習林, 34, 287-299.
32. 西山教雄 (1996) ミズナラの直播き試験, 平成7年度技術官等試験研究・研修会議報告, 17*.
 33. 西山教雄・千島茂 (1996) 定点観測による富士山の景観記録, 平成8年度技術官等試験研究・研修会議報告, 43*.
 34. 丸田恵美子・紙谷智彦 (1996) 太平洋型ブナ林におけるブナ実生の定着過程I
三国山における当年生実生の消長, 森林立地, 38 (1), 43-52*.
 35. Emiko MARUTA, Tomohiko KAMITANI, Midori OKABE, and Yuji IDE (1997)
Desiccation-tolerance of *Fagus crenata* Blume Seeds from Localities of Different Snowfall
Regime in Central Japan, J.For.Res, 2:45-50*.
 36. 池田裕行・西山教雄・千島茂・大橋邦夫・井出雄二 (1997) 東京大学富士演習林ブナ植
栽試験地の成長経過, 東大演報, 97, 1-9.
 37. 亀山敦子 (1997) ブナ (*Fagus crenata*) の発生初期過程における環境要因の影響, 東邦大学
大学院理学研究科修士論文*.
 38. 東京大学農学部附属演習林 (1997) 東京大学演習林気象報告 (自1995年1月至1995年12月),
演習林, 35, 219-231.
 39. 東京大学農学部附属演習林 (1997) 東京大学演習林気象報告 (自1996年1月至1996年12月),
演習林, 37, 177-189.
 40. 三上信之 (1997) 山中湖畔における景観開発地域の現状と展望, 東邦大学理学部卒業論文*.
 41. 会田あゆみ (1998) 太平洋型ブナ (*Fagus crenata*) 林の更新, 東邦大学理学部卒業論文*.
 42. 秋澤淳子 (1998) 様々な森林のA₀層の酸性雨に対する緩衝能, 東京大学農学部卒業論文*.
 43. 熊谷洋一 (1998) 景観アセスメントにおける予測評価手法に関する研究 (1) 景観予測手法,
東大演報, 78*.
 44. 千島茂・西山教雄 (1998) ヒノキの間伐試験 (材積と間伐後の景観), 平成10年度技術官試
験研究・研修会議報告, 28*.
 45. 西山教雄・千島茂 (1998) 富士演習林の冬季の気象に温暖化傾向は認められるか?, 平成9
年度技術官等試験研究・研修会議報告, 68*.
 46. 藤井尚子 (1998) 日本海型および太平洋型ブナ林における更新の状態, 東邦大学理学部卒
業論文*.
 47. 伊藤 尚 (1999) 北限のブナ (*Fagus crenata*) 林の更新に対する霜害の影響, 東邦大学大
学院理学研究科修士論文*.
 48. 佐竹登志子 (1999) ブナ (*Fagus crenata*) の実生の生存と, 成長に及ぼす間伐による照度
変化の影響, 東邦大学理学部卒業論文*.

49. 東京大学農学部附属演習林（1999）東京大学演習林気象報告（自1997年1月至1997年12月），演習林，38，241-253.
50. 大場 領（2000）太平洋型ブナ林の堅果生産，東邦大学理学部卒業論文*.
51. 周 志华（2000）富士山麓カラマツ林における外生菌根菌ハナイグチの分子生態学：マイクロサテライト関連DNA多型マーカーによる子実体，根外菌糸体および菌根のジェネット解析，東京大学大学院農学生命科学研究科博士論文*.
52. 久野洋（2000）冷温帯構成樹種ブナ（*Fagus crenata*）の分布と霜害の関係—霜害発生予測モデルによる検証—，東邦大学大学院理学研究科修士論文*.
53. 津谷行俊（2000）ブナ（*Fagus crenata*）の実生の生存と成長に及ぼす林内照度変化について，東邦大学理学部卒業論文*.
54. 東京大学農学部附属演習林（2000）東京大学演習林気象報告（自1998年1月至1998年12月），演習林，39，153-165.
55. 西山教雄・千島茂（2000）富士演習林の試験地について—主に長期生態系プロットの林分構造—，平成11年度技術官等試験研究・研修会議報告，24*.
56. 大手芳裕（2001）ヒコサンヒメシャラ（*Stewartia serrata*）の植生調査—分布解析で見た親子関係—，東邦大学理学部卒業論文*.
57. 小口 愛（2001）富士山森林限界付近における天然カラマツ林の更新阻害要因，東邦大学大学院理学研究科修士論文*.
58. 木内智之（2001）カエデ（*Acer*）属における光環境における光環境に対する当年枝の成長様式の適応，東邦大学理学部卒業論文*.
59. 菅野仁一（2001）*Acer*（カエデ属）の樹種の地形分布に関する生理生態学的研究，東邦大学卒業論文，1-28.
60. 東京大学農学部附属演習林（2001）東京大学演習林気象報告（自1999年1月至1999年12月），演習林，40，123-135.
61. 西山教雄・千島茂（2001）富士演習林に植栽したウラジロモミ・トドマツの成長過程，平成12年度技術官等試験研究・研修会議報告，56*.
62. 本多寛之（2001）ブナの堅果と実生に対するアカネズミの影響，東邦大学理学部卒業論文*.
63. 芳野元信（2001）広葉樹の侵入したカラマツ人工林における埋土種子の特性，東京大学大学院農学生命科学研究科修士論文*.
64. 浦田亜希子（2002）鳥類の混群形成要因—シジュウカラによる観察—，東京大学大学院農学生命科学研究科修士論文.
65. 梶幹男・八木久義・山本博一・井出雄二・大橋邦夫・芝野博文・仁多見俊夫・蒲谷肇・佐倉詔夫・石田健・木佐貫博光・藤原章雄・松下範久（2002）長期生態系プロットによる森

- 林生態系の解明, 科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書.
66. 工藤康平(2002) ブナ・イヌブナの更新方法と防御・成長様式の関連, 東京大学大学院農学生命科学研究科修士論文.
 67. 東京大学農学部附属演習林(2002) 東京大学演習林気象報告(自2000年1月至2000年12月), 演習林, 41, 217-229.
 68. 藤尾尚子(2002) 産地の異なるブナに関する研究, 東京農業大学卒業論文.
 69. 矢嶋澄子(2002) カエデ属(*Acer*)の分枝様式と水分通導能力, 東邦大学理学部卒業論文.
 70. 山本清龍(2002) 山中湖にみる保養地および観光地としての史的展開と空間構造について, ランドスケープ研究, 65(5), 773-778.
 71. 依田悦子(2002) ブナとイヌブナの実生の初期成長の比較, 東邦大学博士論文.
 72. 梶原陽子(2003) 山地小溪流における付着藻類とグレイザーの季節動態, 立正大学卒業論文.
 73. 白石貴子(2003) 日本列島におけるブナの葉の形態的变化, 立正大学大学院地球環境科学研究科修士論文.
 74. 高橋聡子(2003) ブナ(*Fagus crenata*)稚樹の光順化における地理的変異, 東邦大学理学部卒業論文.
 75. 千島茂(2003) 富士演習林湖畔広場におけるゴミの分布について, 平成14年度技術官等試験研究・研修会議報告.
 76. 東京大学農学部附属演習林富士演習林(2003) 東京大学演習林気象報告(自2001年1月至2001年12月), 演習林, 42, 228.
 77. 東京大学農学部附属演習林(2003) 富士演習林第3期試験研究計画(自平成14年度至平成23年度), 演習林, 42, 49-69.
 78. 西口元(2003) 山中湖村観光業の展開と課題, 東京大学農学部卒業論文.
 79. 本郷哲郎・山本清龍・小野俊彦(2003) エコツーリズムによる地域活性化の方向性と山中湖クラブツーリズムの提案, 日本観光研究学会全国大会研究発表論文集, 18, 249-252.
 80. 山本清龍(2003) 森林景観の評価構造に関する計画, 日本森林学会大会学術講演集, 114, 127.
 81. 齊藤未亜子(2004) ブナ(*Fagus crenata*)稚樹の葉における太平洋型と日本海型の光順化能の比較, 東邦大学理学部卒業論文.
 82. 千島茂(2004) 景観に配慮した森林管理と問題点について, 平成15年度技術官等試験研究・研修会議報告.
 83. 東京大学農学部附属演習林(2004) 東京大学演習林気象報告(自2002年1月至2002年12月), 演習林, 43, 278.
 84. 本郷哲郎・山本清龍・小野俊彦(2004) エコツーリズムを活かした地域振興の方策につい

- て一山中湖クラブツーリズムにおける野鳥観察会を事例として, 日本観光研究学会全国大会研究発表論文集, 19, 265-268.
85. 山本清龍・小野俊彦・本郷哲郎 (2004) 探鳥地としての山中湖の歴史, H16年度日本造園学会関東支部大会事例・研究報告集, 19-20.
86. 山本清龍・坂上大翼・柴崎茂光・田中延亮・広嶋卓也・堀田紀文 (2004) 森林の多面的機能の組み合わせに着目した森林教育プログラムの開発, 日本森林学会大会学術講演集, 115, 386.
87. 山本清龍・坂上大翼・柴崎茂光・田中延亮・広嶋卓也・堀田紀文 (2004) 野外教育および環境教育における教育効果把握の手法について, 日本環境教育学会第15回大会 (東京) 発表要旨集, 64.
88. 山本清龍・広嶋卓也・堀田紀文・柴崎茂光・田中延亮・坂上大翼 (2004) インタープリテーションのための森林の機能の分類と組み合わせに関する考察, 日本野外教育学会第7回大会プログラム・研究発表抄録集, 52-53.
89. 山本幸憲・山本清龍 (2004) 富士演習林産変形菌, 高知県の植物, 18, 52-77.
90. 石橋整司・藤原章雄・山本清龍・前原忠 (2005) 森林から学ぶ「森林生態系と人間社会との関わり教育プログラム」の検討, 日本森林学会大会学術講演集, 116.
91. 石橋整司・西山教雄・千島茂・山本清龍 (2005) 東京大学富士演習林における寒地性樹種育成試験, 日林関東支論, 56, 41-42.
92. 高橋彩子 (2005) 太平洋型ブナと日本海型ブナの光順化能に関する生理的・形態的比較, 東邦大学理学部卒業論文.
93. 千島茂・西山教雄 (2005) 富士演習林における長期生態系プロット5年間の動態, 平成16年度技術職員等試験研究・研修会議報告.
94. 東京大学農学部附属演習林 (2005) 東京大学演習林気象報告【修正版】(自2002年1月至2002年12月), 演習林, 44, 296.
95. 東京大学農学部附属演習林 (2005) 東京大学演習林気象報告 (自2003年1月至2003年12月), 演習林, 44, 320.
96. 富士演習林創設80周年記念事業企画委員会 (2005) 東京大学富士演習林の80年一軌跡と未来一, 187.
97. 山本清龍・本郷哲郎 (2005) 地域住民が持つ観光地山中湖のイメージに関する研究, 第20回日本観光研究学会全国大会学術論文集, 45-48.
98. 山本清龍・柴崎茂光・坂上大翼・広嶋卓也・堀田紀文・田中延亮 (2005) 富士山を題材にした森林教育テキストの開発と実践, 日本森林学会大会学術講演集, 116.
99. 山本幸憲・山本清龍 (2005) 山梨県産変形菌追加II, 高知県の植物, 19, 91-109.

100. 茂内康裕 (2006) カエデ属の伸長様式と通水能力, 東邦大学理学部卒業論文.
101. 竹内琢磨 (2006) 樹木年輪を用いた太陽黒点と気候変動に関する研究, 立正大学地球環境科学学部卒業論文.
102. 千島茂・齋藤俊浩・才木道雄・高德佳絵・荒木田善隆 (2006) 富士演習林の鳥類相 (2005年繁殖期), 平成17年度技術職員等試験研究・研修会議報告.
103. 東京大学農学部附属演習林 (2006) 東京大学演習林気象報告 (自2004年1月至2004年12月), 演習林, 45, 291.
104. 広嶋卓也・山本清龍・田中延亮・柴崎茂光・堀田紀文・坂上大翼 (2006) 富士山を題材とした森林教育プログラムの開発・実践と効果把握—初等・中等学校における森林教育実践上の課題と対応策, 日本森林学会誌, 88 (3), 160-168.
105. 山本清龍 (2006) エコツーリズムを活用した森林教育の展開可能性について, 日本森林学会大会学術講演集, 117.
106. 山本清龍 (2006) 富士五湖におけるリゾートイメージの差異に関する研究, 第21回日本観光研究学会全国大会学術論文集, 253-256.
107. 石森雄基 (2007) ブナとミズナラの開葉時期と蒸散開始の関係, 東邦大学理学部卒業論文.
108. 小宮英之 (2007) 冷温帯落葉広葉樹ブナとミズナラの水分生理特性の比較, 東邦大学理学部卒業論文.
109. 坂巻のぞみ (2007) 亜高山性針葉樹シラビソ (*Abies veitchii*) の冬季の水分収支における成木と稚樹の比較, 東邦大学大学院理学研究科修士論文.
110. 千島茂 (2007) 富士演習林と運動会の関係の歴史と今後のあり方について, 平成18年度技術職員等試験研究・研修会議報告.
111. 東京大学農学部附属演習林 (2007) 東京大学演習林気象報告 (自2005年1月至2005年12月), 演習林, 46, 391.
112. 宮内翠 (2007) 太平洋型ブナと日本海型ブナの開葉時期と霜害感受性, 東邦大学理学部卒業論文.
113. 山本清龍・井倉洋二 (2007) 森林教育プログラムの評価に関する一考察, 日本森林学会大会学術講演集, 118.
114. 山本清龍 (2007) 富士五湖におけるリゾートイメージの構造に関する研究, 関東森林研究, 58, 5-8.
115. 算用子麻未・千島茂 (2008) 富士演習林寒地性樹種育林試験の成長経過, 平成20年度技術職員等試験研究・研修会議報告, 33-39.
116. 篠原正 (2008) 森林地区の腐食環境—東大富士演習林での暴露試験結果—, 腐食防食シンポジウム, 165, 42-48.

117. 東京大学農学部附属演習林（2008）東京大学演習林気象報告（自2006年1月至2006年12月），演習林，47，102.
118. 松永咲（2008）太平洋型ブナ林におけるブナ実生の生存と成長—太平洋側でブナ林は存続できるのか?—，東邦大学理学部卒業論文.
119. 山本清龍・井倉洋二（2008）ESDの観点からみた森林教育の評価に関する一考察，日本森林学会大会学術講演集，119.
120. 小宮英之（2009）環孔材樹種ミズナラと散孔材樹種ブナの水分利用特性の比較，東邦大学大学院理学研究科修士論文.
121. 千島茂・算用子麻未（2009）景観施業のための枝条と枯損木の積み方に関する一考察，平成21年度技術職員等試験研究・研修会議報告.
122. 東京大学農学部附属演習林（2009）東京大学演習林気象報告（自2007年1月至2007年12月），演習林，48，152.
123. 東京大学演習林鳥類研究会（2009）東京大学演習林鳥類目録，演習林，48，103-132.
124. 東京大学農学部附属演習林（2009）東京大学演習林気象報告（自2008年1月至2008年12月），演習林，49，62.
125. 山本清龍（2009）エコツーリズムにおける森林・環境教育の役割と可能性，日本森林学会大会学術講演集，120.
126. 算用子麻未・千島茂・石橋整司（2010）東京大学富士演習林寒地性樹種育林試験地の成長解析，日本森林学会大会学術講演集，120，Pa3-20.

富士癒しの森研究所第4期教育研究計画(2011(平成23)年度～2020(平成32)年度)編成者一覧
肩書き、職名等は2010(平成22)年4月当時のもの

編成主査	林長	准教授	後藤 晋
分担者	教育研究主任	助教	藤原章雄
		助教	齋藤暖生
	技術主任	技術専門職員	齋藤俊浩
		技術専門職員	西山教雄
		技術職員	千島 茂